

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4392300085		
法人名	株式会社いわしや窪田		
事業所名	グループホームみずほ		
所在地	熊本県下益城郡美里町安部235-1		
自己評価作成日	令和6年3月1日	評価結果市町村受理日	令和6年5月21日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和6年3月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

住み慣れた美里町で入居者やご家族にとって安心安全にその人らしい生活が出来る様に誠心誠意努力し地域の方や医療機関等と連携を図り支援を行います。
職員のほとんどが美里町出身で会話の中にも共通の話が出て和気あいあいと仕事をしています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

本年度は一つの区切りとして書類の見直しや改定を行い、新たに“広報誌などへの写真の使用に関わる同意書”を追加し、情報の漏えいや保護、プライバシーにかかわる家族等の意向を改めて確認する事が出来ている。コロナ感染症の5類移行外出にも力を入れており、外の煙を見て「どんどやだろ～行こうか～！」行くのが遅れたために「来年は早や行かなん！」など、入居者の一言は情報収集の必要性を職員に新たな気づきとしてもたらしめている。当地域は県内でも高齢化率が高く、介護予防事業への場所提供や、認知症啓発活動への参加など地域の一員としてできる事で貢献し、入居者・家族にここに来て良かったと思ってもらえるよう努力していきたいとしている。新年度の歩みにも期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「みずほ基本理念」については職員会議などで共有しており、朝の朝礼にて再確認を行っている。	昨年秋の管理者交代に伴い、管理者及びケアマネジャーの2名体制としている。法人3事業所を統括する責任者と連携しながらホーム理念を見直し、新年度(令和6年)より「共に学び、共に支え、共に歩み、共に笑う」を基本理念として、スタートする事としている。	これまでの理念を振り返り評価するとともに新たな理念は職員会議で紹介し、今後家族や運営推進会議の中でも報告したいとの事である。入居者と共に家族や地域の力を借りながら、理念が浸透していくことが期待される。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で訪問等を中止していたが、少しずつ緩和しており、初詣や地域行事にできる範囲で参加している。面会も開始している。	コロナ感染症の5類移行、入居者が少しずつ地域へ出る機会を作り、地域資源を活用した外出(初詣、どんどや、バラ園見学)などに出かけている。直接的な交流はこれからだとしているが、高校生による和太鼓演奏の来所や、管理者やケアマネジャーがキャラバンメイトとして地元の小学校などへ出向き、認知症の啓発活動に参加している。地域の代表者からは「消防訓練の際には声を掛けて欲しい」との好意的な言葉を受けており、有事の際の地域との協力体制が期待されることである。	今後学生の体験実習先として受け入れを検討したいとしている。取組が期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	小学校や美里町の地域ごとに行われている認知症サポーター養成講座・キャラバンメイトに参加している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍で開催を中止していたが運営推進会議も令和5年12月より開催開始になっている。	本年度は12月の会議より参加者との対面開催に移行しており、行政、社協、包括センター、区長や家族代表を委員として直接顔を合わせての会議に、活発な意見が交わされている。ホームの現状を明らかにし、透明性のある運営を進めており、委員からの意見や質問に応じる形でホーム側が返答しており、議事録が読み手にわかりやすい様式となっている。	推進会議に参加する委員と改めて会則の読み合わせを行い会議の役割を再認識し、施設見学を通して入居者の普段の様子を見てもらうことなどを計画している。新年度より地域から民生委員を新たにメンバーの一人として選出するなど、更なる地域情報の収集が運営に反映されることが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	行政からの様々な情報はメールなどで毎日確認を行っている。令和6年より美里町施設情報公開依頼され参加している。週1回介護予防教室にデイホール提供。	行政からの情報はメールや電話でやり取りしているが、質問や不明な点があれば直接訪れ、説明を受けるようにしている。事故報告書は速やかに提出し、認定調査時には入居者の現状を見てもらうようにしており、家族が同席されることもある。週1回介護予防事業に別棟を提供し、キャラバンメイトの活動を通して包括センターと連携している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束については勉強を実施。外部の研修にも参加している。事故報告で離設も出ているが施錠も含め身体拘束をしないよう取り組みを行っている。	同業者等による宇城市のブロック会には研修内容などに応じて職員が参加しており、身体拘束や虐待について参加した際には、復講にて全職員が内容を共有している。離設については事故として行政に報告し、家に帰りたいという入居者の思いを封じることなく、一緒に出掛け家を見ると安心して帰られるなどできる事には対応したいとしている。	センサーマットなどを使う入居者もおられるが、定期的に評価しながら必要の可否を見極め、外す方向で検討しており、今後も経過を個人記録に残しながら対応されることが期待される。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止については勉強を実施。外部の研修にも参加している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現時点では該当者はみられない。研修などに参加し勉強する必要がある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書やその他の書類に関しては丁寧な説明を心がけている。納得された上で署名や捺印をいただいている。不明な点はその都度聞き説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映	施設内に意見箱を設置している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
		利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時や電話対応の時など施設に対しての要望を聞くように努力している。	入居時には家族に対して、わからない点や不安なことがあれば遠慮なく話してもらうよう伝えている。コロナ禍では毎月文章にてホームの状況を伝えており、面会が対面で出来る現在は来所時に意見や要望を尋ねるようにしている。入居者の要望は日々の関わりの中で尋ねており、「饅頭が食べたい！」との一言に早速準備し、手作りの饅頭づくりに積極的に参加されたようである。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	個別面談を行いながら職員の意見を言える様に機会を設けている。	職員の意見や要望は普段から聞くようにしているが、個人面談時には時間を設けて改めて尋ねている。勤務体制に対する要望が多いようであり、夜勤専従やパート職員等個々の状況を考慮してシフトを作成し、有休や希望休に応じながら、資格取得に向けた後押しを行っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員1人1人に合った働き方の条件を聞き上司と相談しながら必要に応じて対応している。働きやすい職場環境も目指している。離職率は少ない。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	認知症介護基礎研修終了し無資格者なし。介護福祉士やケアマネジャー試験を受ける予定者もいる。研修の情報があれば職員回覧を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	宇城ブロック会の会議や勉強会に参加している。他の施設のやり方や意見を聞く機会を設けている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係	入所時にご本人、ご家族話を傾聴し、意		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
		サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	見交換を行い関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所時にご本人、ご家族話を傾聴し、今後のケアについて話し合い、サービス内容の変更時には意見を尊重しながら話し合いでの検討、対応を心がけている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	要望の中から何が必要かを優先順位を見極め適切なサービスの提供が出来るよう話し合いを重ね支援している。必要に応じてプランの差し替えを行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の意向や能力に応じて無理のない範囲で職員と一緒に行動する様に努めている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日常生活に関する情報などは電話などで報告しており、ご家族に出来る範囲で協力をお願いしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしていた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	対面の面会も解禁され関係性作りは出来ている。写真を送るなどの試みを行った所電話がかかってくるなど事例もあった。	対面での面会が可能になったことで、家族とお盆の墓参り等が出来ており、入居者には懐かしい初詣やどんどや見学を支援している。職員との関係性もしっかり根付いており、差し入れの白菜を漬物にしたり梅干しを購入してきた際には「こぎゃん買わんでちやこで漬ければいいたい！」と言われるなど先人の手ほどきを受けながら馴染みの保存食作りも一緒に行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援	個々の性格や相性などを見極めながら		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
		利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	テーブルの配置の配慮は行っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	情報提供の必要性があれば情報提供を行っていきたい。状態が安定していれば再入所の申し込みも受け入れている。		
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常生活の会話の中で本人の思いを言われることがある為日頃よりコミュニケーションは大事にしている。	入居者の思いは普段の会話からくみ取るようにしている。外出傾向にある方も一緒に自宅まで行くことで安心されるなど、何かの理由があつての行動であることを心にとめるようにしている。入居者の言葉や職員の気付きは全員で共有して、できる事については早めに対応する事としている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	以前関りのある機関と連携を図り情報提供を基に把握を行っている。 本人や家族の方にも話を聞いている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々のバイタルチェックや体調確認、行動は記録や申し送りにて把握をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画書を作成し担当者会議開催必要時に差し替えを行っている。	本人・家族の意向を優先し、職員意見を反映しながらプランを立案している。プランには入居者・家族の思いがそのまま載せられ、初回、「家の事が気になるので治ったら帰りたい！」との言葉から3か月後にはホームでの生活にも慣れ、楽しく過ごしていることやこれからも元気でいたいとの思いが記されている。同時に家族が安心していく様子も表記され、課題分析や援助内容を関係者の力を借りながら支援している。3か月ごとのモニタリングは記録から拾うようにしており、今回ケース記録の様式も見直しが行われている。	
27		○個別の記録と実践への反映	個別の記録は実施しているが今後記録		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
		日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	の機能性は見直していく必要がある。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者の課題に対しての対応は出来る所は前向きに取り組んでいるが柔軟な支援は課題である。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域行事の参加を少しずつ増やしていきたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ほとんどの方が訪問診察を受けておられる。緊急時や体調変化等の受診はご家族に連絡後対応が難しい場合のみは職員対応をしている。	殆どの方が協力医療機関による月1回の訪問診察を受けておられるが、家族の対応でこれまでのかかりつけ医への受診外出も行われている。また、週1回、訪問看護支援も受けている。受診結果は家族も気になる点であり、何かあれば速やかに報告されている。体調不良等受診の必要があれば、家族へ連絡しホーム職員で受診対応を行っている。口腔ケアについては毎食後個々に応じて支援しており、治療など必要がある方には訪問診療で対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回の訪問看護を導入しており、状態報告を行い連携を図っている。24時間体制の為体調変化等あれば電話連絡し指示ある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中には定期的に病状の確認を電話対応にて行っている。 入院時には医療情報提供書の提出を行い関係機関との連携に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援	以前は施設での看取りは行っておらず入		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
		重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	居時に説明を行っていたが、医療処置がなくご家族の希望や医療機関の協力体制もあり現在1名看取り期に入られている方がいる。	現在、体制が整っておらず、ホームでの看取り支援は行わないこととし、入居時に家族へ説明を行っている。しかし、医療機関からの退院後、受け入れ先が決まらない例などもあり、主治医との連携を図りながら特例としての支援も行われている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時連絡体制を掲示職員各自に連絡網を配布している。人員が少ない時の応急処置は訓練が必要。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練や防災訓練が出来ておらず令和6年2月に通報訓練を行った。4月～5月にかけて地域の方を交えて消防訓練を行う予定。	今年度は2月に通報訓練1回のみ実施している。運営推進の中で地域代表者より、避難訓練で地域消防団の参加協力の必要があれば言うて欲しいとの心強い意見を受けている。新年度4～5月に地域を交えて消防訓練を予定している。今後安全確認としてベッド周りなども徹底したいとしている。備蓄はリストに沿って確保しており、BCPIについては法人で作成し、職員間でも共有されている。	今後は年2回の訓練の実施が期待される。確保している備蓄を含め取り組んでいる災害対策については、家族にも伝える事で安心や、意見を受ける機会につながると思われる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉遣いについては今後も研修や注意をしていく必要がある。	入居者の呼称は苗字を基本としているが、反応などから家族の同意を得下の名前でも対応している。入居者への言葉使いについて管理者は、気になる場面があるとして、今後も研修の機会をもち徹底していきたいとしている。職員の守秘義務は入職時や会議、研修会の中で周知徹底を図っている。広報誌などに掲載する写真は、家族の同意を得て使用している。身だしなみやおしゃれの支援として、特に家族との外出時は贈られた衣服を着てもらったり、お化粧品などもサポートしている。髪の毛のカットは家族と美容室へ出かける方や、ホーム内で職員による支援も行われている。	ホーム内の職員によるカット支援は開設時から継続されているが、改めて訪問カットの利用などについても情報を収集し、家族にも要望を聞かれることも良いと思われる。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援	可能な限りご希望を聞き支援を出来る様		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
		日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	にしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務優先の部分がある。少しずつではあるが起床、就寝時間をその人に合わせる様になってきている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	多い頻度ではないが家族との外出時には誕生日時に送っていただいた洋服を着られたり、お化粧をされたり支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一緒に食事の準備をする事はないが、饅頭作りや季節に応じておやつ作りを行っている。業者も4月より変更予定。	現在、三食を業者による冷凍の料理を湯煎し、個々の嚥下力に応じて常食やキザミ、ミキサー食などで提供している。おやつは可能な限り希望に沿って手作りをしており「饅頭を食べたい！」の要望から饅頭作りを企画したり、ふかし芋を準備した際は、芋植えの手順を懐かしそうに話されたようである。誕生日にはホールケーキで祝い、喜ばれている。職員は持参した弁当などを摂っており、検食者などは設けられていない。	近隣から野菜(白菜・里芋など)の差し入れも行われており、今後はそれらも活用しながら定期的にホーム内調理の日を設ける事も入居者の楽しみや出番につながると思われる。また、芋の苗植えを話された方もおられ、敷地内の菜園で実現が期待される。職員配置などの面から現在、調理済みの料理を活用されており、今後は職員が1名でも同じものを摂る機会を設け、思いを共有しながら気付きなどを業者と意見交換する事も必要と思われる。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事に関しては管理栄養士が考案した為バランスはとれていると思う。水分量は確認を行い記録に残している。水分量の少ない方は好まれる物を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、その人に合った対応で口腔ケアを実施している。		
43	(16)	○排泄の自立支援	日中はなるべくトイレ誘導を行い排泄を促	トイレは4か所備わっており、使い慣れた場所	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
		排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	している。	などへ日中はトイレでの排泄を基本に支援している。個々に応じた排泄支援により、リハビリパンツから布に変更された方もおられる。入院された方が退院後はトイレでの排泄が難しくなった方もおられ、状態を見ながら職員も小まめな誘導に努めている。できるだけ排泄の失敗をなくすことは個々の尊厳や家族の負担軽減にも繋がっている。夜間はオムツへの変更やポータブルトイレを使用される方も多く、特にポータブルトイレは臭気への対策として使用の都度廃棄し、日中の掃除が徹底されている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日排便状況を確認しており適度の運動や水分の入り等確認を行っている。 2～3日排便ない時には下剤コントロールを行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週2回以上の入浴を実施している。日中はの時間の支援は可能だが夜入浴希望の支援は出来ていない。	週2回以上の入浴を支援しており、入居者の中にはこだわりや好みのシャンプーなどを用意される方もおられるようである。拒否がある場合は時間を置いて再度声をかけているが、難しい場合は翌日に変更している。汚染時は着替えだけでは不快さが残ったり臭気への配慮から、その都度入浴やシャワーで対応している。季節湯の支援として菖蒲の他、柚子は敷地内に実る事から、入居者と一緒に収穫し湯船に入れている。入浴後はお茶や好みのコーヒー、スポーツ飲料などが水分補給として準備されている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中傾眠されている方や状況に応じてソファーや居室誘導し臥床の時間を設けている。 夜間帯は定時に巡視を行っている。室内環境、服薬管理を行い安眠出来る様に対応している。		
47		○服薬支援	職員が薬の内容確認が出来る様に個人		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
		一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	カルテに管理している。 薬変更時しばらくは変化がないか確認し異常見られる際は指示を仰いでいる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物干しやたたみなど行ってもらっている。 施設周辺の散歩の行っている。 塗り絵や壁画制作等		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出がなかなか出来ておらず4月には花見に行く計画を立てている。 初詣やお墓参りの個別支援は出来ている。	山々を眺めながら敷地内をゆっくり散歩できる環境にあり、気候の良い季節は庭先で歌詞カードを開いて歌を楽しむなど入居者が穏やか時間を過ごされている。バラ園見学や歌謡ショー見学など地域への外出も支援している。中には外出を好まない方もおられ無理強いをしないようにしている。帰宅願望がある方には、趣味の読書の本を自宅に取りに帰ったり、敷地内で日課の四葉のクローバー探し、初詣など個別支援に取り組んでいる。初詣参拝でのおみくじは、入居者が大変喜ばれたようである。家族の協力として日中、数名の方が墓参に出かけられ安心した表情で帰園されたようである。来月は花見も予定されている。今年はお出遅れてしまったとんどや見学に来年は早めに出かけたいとしている。	この1月入居者が外の煙を見て「どんどやだろ～！？」と言われその後は昔ながらの行事「もぐら落とし」に話が展開するなど、先人の経験がホームの日常に活気をもたらしている。今後も季節を感じる外出や個々の希望に応じた外出に取り組まれることを期待したい。また、外出支援の際、家族も参加できるような内容や目的地であれば参加を呼び掛ける事で双方の楽しみに繋がると思われる。今後の取組が期待される。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お小遣い程度の金額は所持して頂いている。 金額が大きい方に関しては了承の元必要時に渡して使用して頂いている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話の制限はなく取次を行っている。 年賀はがきのお礼に電話で家族の方と話されている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり	共用のスペースでの環境作りは行ってい		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
		共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	るが、居室内の生活感が出来ておらず家にある物や本人が使用していたもの、安心できるものを持ってきて頂けるように工夫を始めている。	共用スペースには、入居者も一緒に作成した切り絵などの作品が掲示されている。開設年度が異なることから外観やホーム内の雰囲気も違っているが、職員は入居者が安心して過ごせるような環境に努めており、職員の明るさやチームワークも居心地の良さに繋がっている。コロナ5類移行後も掃除や換気、消毒など必要に応じて取り組んでおり、特に整理整頓は入居者の安全な歩行や移動にも繋がることから注意を払っている。	ホームの敷地内には様々な草花が咲いており、今後も季節を感じる事が出来るよう、散歩中に一緒に摘みながらホーム内に飾られると良いと思われる。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファの配置(1人掛け・数人掛け)クッションやひざ掛けなどゆっくりと過していたできるように心がけている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人とご家族と話をし在宅で使用していた物の持ち込みをして頂き自宅の様な空間で過ごして頂けるようにしていきたい。以前より入居している方は環境を変更するのは難しい。	家で使用していた物やこだわりの物が居室にあると安心されることを家族へ伝え、持ち込みを依頼している。テーブルなどの家具や思い出の写真、テレビを持ち込まれた方もおられる。また、以前より入居されている方は、環境の変化によって生じる本人の不安なども考慮し、新たな持ち込みよりもその時々で不足などがないよう家族の協力も得ながら取り組んでいる。コロナ禍中は衣替えをはじめ衣類の管理は職員が中心に行っていたが、面会が可能になり家族が不足の品を持参されたり、衣替えの季節に合わせての面会も見られるようである。	居室に馴染みの品がある事で安心される方や逆にスッキリとした空間が落ち着かれる方などもおられることから、引き続き個々の状態や思いをくみ取りながら支援されることを期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室の表札を使用したり、トイレが分かるように表示したりしている。館内移動が安心安全にできるように設備している。		